

# グローバル化と新しい文化階層：情報環境の高度化の意味するもの

## Globalization and New Cultural Stratification : Implications of Advanced Information Environment

川崎 賢一

### <要旨>

現代社会のライフスタイルを支える、日本人、特に青年世代の趣味行動を文化社会的に分析することを目的とする。その際、理論枠組みをこの分野の第一人者である片岡教授のいう<オムニボア仮説>を参照にして、その特色を社会階層の近年の動向と関連付けて明らかにする。しかしながら、その際、日本の社会の特色である、エスニシティやコスモポリタニズムを考慮することが弱いという現状を踏まえて、グローバル化の進展に伴う<地球市民>という観点や<人新世>という新しい時期区分が提起している<ホモデウス化（ハラリ）>等の知見を参考に、より分析対象と枠組みを広げようとする試みをしてみたい。また、これらの大きな変化の背景にある二つの大きな転換点ないし断絶（①文化制度のデジタル化に伴う断絶、②巨大で長期的な構造的変換（人類のかつ地球の変換点）に伴う断絶）を指摘し、今後の可能性を探ってみたい。

### <キーワード>

趣味行動、日本文化、文化制度、文化階層、グローバル化、地球市民、コスモポリタニズム、デジタル化

## 1. グローバル化と文化階層

### 1-1：グローバル化の基本動向

1980年代半ばに端を発する、民営化の波と情報通信ならびにコンピューター情報処理の融合は、政治的にはいわゆるネオコンに支えられて、経済的には、金融資本主義により、グローバル化を全面的に、そして、世界のほとんどの国々に推し進めることになった。1980年代終わりには、ソビエト連邦が崩壊し、東西冷戦が終焉を迎えた。その後、アメリカ1極集中が進むように思われていたが、実際には、アメリカ初の多国籍なグローバル企業がヘゲモニーを握る一方で、2010年代になると、徐々に多極化が進んでいった。そういう中で、中国の台頭がみられ、その規模と戦略により、2020年代に入るとはっきりとした、米中のヘゲモニー争いが明確になってきた。

ただし、この<米中対立>は一筋縄では進まないようだ。2022年の習近平国家主席の3選が実現する一方で、ウィルス対策（ゼロコロナ政策からの立ち直り）やウクライナ侵略の長期化への対応の難しさ、台湾の平和統一という課題、等により、簡単に中国がアメリカを追い越し、欧米・日

本以外のリーダーシップをインフラとして、もう一つのグローバルスタンダードを築こうとするには、多くの困難さが待ち受けている。

### 1-2: <多極化>状況の意味すること

ところで、グローバルな状況で、2020年代以降<多極化>という方向が、あちこちで指摘されている。アメリカの経済力や安全保障力が相対化し、その一方で、中国の台頭、インドやBRICS諸国の成長、様々なグローバルサウスの国々の登場などが見られ、今までの欧米プラス日本のG7が世界全体を単純に支配することは難しくなりつつある。

また、中国の登場は、ややもすると、国内の共産党一党支配、対外的なヘゲモニーの拡大だけに、焦点が当てられがちであるが、事情は複雑である。ICT分野では、<通信の壁>を設け、アメリカから技術を取り入れ、国内の巨大市場で培ったICT産業をグローバル市場に進出させ、一帯一路政策などで、そのヘゲモニーを経済的に・国際関係論的に拡大してきた。中国にとって幸いなことに、中国は欧米・日本のグローバルネットワークの外側に位置付けられることが多く、国際的な義務や役割を負うことが少なかったので、欧米側から見ると、知らないうちに力をつけてきて、自分たちのやり方を主張・実施するようになってきたように見えるのである。

したがって、<多極化>は、簡単に<〇〇から××へ>と予測できないだろうし、多くの国際的協調ネットワークのぶつかり合いが当分続くことになるだろう。特に、中国の場合は、歴史的に中の悪かったロシアを上手く従わせることができれば、20世紀的秩序だけでなく、21世紀的秩序（サイバーや宇宙空間など）への進出と、欧米・日本への対抗的存在に十分なれるであろう。いずれにしろ、グローバルな意味で居心地の悪い状況が、しばらく続かざるを得ないだろう。

## 2. 日本の状況：遅れてきた階層分化と新しい状況

グローバル化に伴い、1980年代までに成立してきた、中間階層の蓄積が、90年代以降徐々に分解・下降してきた。特に、アメリカやイギリスにおいては、ごく一部の新興富裕層が富の大部分を独占し、いわゆる<分断>起きて、それが社会的連帯や国民的アイデンティティの混乱や対立を招いてきた。日本においては、1990年代初めの<バブルの崩壊>以降、構造改革を十分に進めることができず、むしろ、経済成長を押さえつつ、消費生活を合理化・ローブランド化することにより、生活の中身は低価格化・効率化させて、結果として、円安による国際的競争力を増加させるという、皮肉な結果になった。そうはいつても、グローバル化による<分断>は着実に進み、新しい新興成金の人々は確実に増加する一方で、中間階層がより下層に移動するという結果となった。

### 2-1: 現代日本の新・社会階級：経済の伸び悩みと社会構造

この話には続きがある。週刊ダイヤモンドでは、2023年に入り、同じ対象について続編を特集する（2013年1月23日号、24-55頁）タイトルは<超・階級社会：貧困ニッポンの断末魔>で、①低成長、②低賃金、③弱すぎる円、④貿易赤字の常態化、という要因を<四重苦>としてとらえ、階級格差がさらに拡大しているという。問題は上級国民VS中流貧民という格差に留まらず、1億総転落の<超・階級社会>が訪れようとしていると指摘する。つまり、「出自や環境で階級が定まる<日

本版カーストとでもいえる世界」で、逆転不能社会になりつつあるという。ただし、富裕層だけに限定すると、コロナ禍でも富裕層が急増しているという指摘もある。（週刊ダイヤモンド2023年4・29 / 5・6合併号、特集：シン富裕層）つまり、さらに、階級格差が拡大している可能性がある。

## 2-2：グローバルな文脈での経済構造

しかしながら、多くの日本人にとって、先に説明したとおりに、従来の常識的見方とは異なる社会階層イメージが持たれていることも事実だろう。例えば、2019年まで急激に増加してきた、外国人旅行者（2019年度で3300万人）や日本に住み始めた外国人の日本社会・文化に対する印象はすこぶる良いものであった。確かに、円安の結果でもあるが、〈日本イメージ〉は極めて良好に感じられている。海外経験の乏しい、外国人旅行者の感想をそのまま信用する日本人の観点からすると、雑誌ニューズウィークの特集を要約すると、以下のようにリアリティのあるものだ。

特集：世界が称賛する日本の暮らし、NewsWeek日本版、2022. 8.9-16合併号、p.p.30-41

〈ライフスタイル：外国人が証言する暮らしやすい日本〉

- ① 治安：子供が自由に歩ける日本の不思議
- ② 医療：平等・最新・丁寧な世界一の保険診療
- ③ 食文化：発想力こそ日本食の神髄だ
- ④ 物価：世界が〈安っ！〉と驚く国
- ⑤ 多様性：〈余裕〉から生まれれる放任のありがたさ
- ⑥ 趣味：包容力にあふれたオタク天国です
- ⑦ 交通：米大使が太鼓判、日本の鉄道は世界最高！

確かに、日本の社会や文化は、近代社会として、成長は一部に限られているが、全体として成熟期に達していると、多くに日本人が実感していることの結果でもある。要するに、単に日本の状況や海外からの対内的な動きだけに留まらずに、世界的あるいはグローバルな文脈に、日本の新しい社会階級を置き直して見る必要があるように思う。

## 3. グローバル化と〈オムニボア仮説〉

### 3-1：片岡の〈オムニボア仮説〉

グローバル化を通じて、文化システムは様々な構成要素間で、混合化・融合化・並立化・統合化・分散化等が進んできた。それを社会学の過去の遺産を通じて整理すると、文化的雑食性あるいは文化的オムニボアと呼ぶことができるだろう。

先行研究について、主要な研究者の一人である片岡の整理によると、文化的雑食性（cultural omnivorousness）および文化的オムニボアは、少なくとも次の7つの特徴をもつという。（片岡、2022）

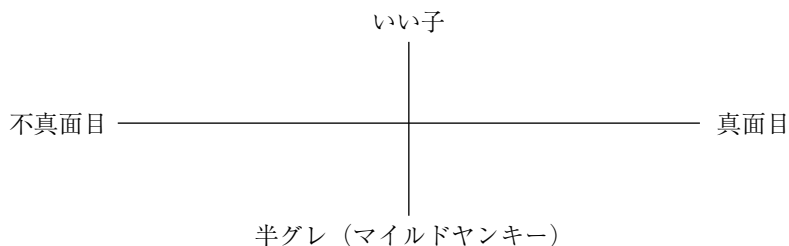
- ① 〈テイストの幅広さと多様性〉

- ② 〈消費の貪欲性〉
- ③ 〈開放性と民主性, 政治的寛容性〉
- ④ 〈ジャンルを問わない文化的識別力〉
- ⑤ 〈特殊なものの選択と識別〉
- ⑥ 〈新しい美学的感性〉
- ⑦ 〈文化的ヒエラルキーの改変・創造〉

片岡が分析し、明らかにした〈文化的オムニボア〉という理論仮説は、先に述べた、日本社会・文化の成熟という観点からすると、基本的に的確な描写になっているだろう。ただし、その際、それを支えているそれぞれの国民文化が独立して機能しているという前提で語られているように思われる。

大空の分析は、彼のいう〈親ガチャ〉の指摘が、原則として個人レベルにとどまり、NPO的な実践にとどまっているように思われる。これらの点について、金間大介（2022、2023）は よりの確・拡大して分析している。金間によると、若者を〈いい子症候群〉として特徴を明らかにしている。①素直で真面目、②受け答えがしっかりしている、③一見さわやかで若者らしさがある、④協調性がある、⑤人の話をよく聞く、⑥言われた仕事をきっちりこなす、⑦飲み会に参加する、という7つの行動特性があるという。これらの裏返しとして、①自分の意見は言わない、質問もしない、②絶対〈先頭〉には立たず、必ず誰かの後に続こうとする、③学校や職場では横並びが基本、④授業や会議では後方で気配を消し、集団と化す、⑤場を乱さないために演技する、⑥悪い報告はギリギリまでしない、という消極的姿勢も持っているという。そして、その内面には、①目立ちたくない、100人のうちの一人でいたい、②変なことを言って浮いたらどうしようといつも考える、③人前でほめられることが〈圧〉、④横並びで遺体、差をつけたくない、⑤自分で決めたくない（皆で決めたい）、⑥自分に対する人の気持ちや感情が怖い、⑦自分の能力に自信がない、という心理特性に基づいているという。

大空や金間の分析は、現在青少年に関する社会的性格として、原田曜平（2014、2020）の有名な分析である、マイルドヤンキーや日本のZ世代論と組み合わせると、20世紀後半の社会的価値や規範に対する基本軸（真面目—不真面目）とは対照的な基本軸となっているように思える。



〈図：新しい社会的価値観と社会的性格〉

それらを図示すると、上記のような4つのタイプ分けとしてまとめられるだろう。一見ねじれたように見える状態を、さらに詳しく分析していく必要があるだろう。

### 3-2：グローバル化とくオブニボア仮説＞：カンナのZ世代論

しかし、グローバル化の観点から、もう少し広い分析が可能だろう。その際、日本文化や日本の青年世代という特定の要因も、考慮する必要があるが、ナショナルな観点や日本文化からいったん離れて、グローバル化という条件下で、新しい文化的状態を考えてみよう。具体的に、グローバル化という趨勢に対応した広い観点から分析してみよう。

国際的に著名なカンナは、「移動」という近著の中で、グローバル化が進む世界において、新型コロナウイルスの世界的感染状況にもかかわらず、①人口動態、②政治、③経済、④テクノロジー、⑤気候などの要因から、大量移住時代が到来するという。実際には、遠方の移動より、地域内移動の方が大きいかもしれないが、「歴史の大半で、場所厳密にはく一つの場所に留まること＞が、アイデンティティと安定を生み出してきた。だが、仕事もほとんどない、腐敗だらけのまともに機能していない社会で育ってきた若者たちは、自分のことは自分で何とかするしかない。彼らは選挙権よりも移住できることをより重視していることが、各調査からも明らかになっている」（上巻85頁）という。つまり、新しい文化階層を考察するにあたり、く世代＞という視角が、最初の重要な論点だということを主張している。

カンナによると、世界的な規模で世界第二次大戦後、次のいくつもの世代が生起してきた。

- ① アルファ世代（元のシナリオ）、
- ② Z世代、
- ③ ミレニアル世代（Y世代）、
- ④ X世代、
- ⑤ ベビーブーム世代

以上の6つについては、これらの世代は概ねどの社会にも当てはまるだろうが、その実際の時期・規模・特質は、各社会によって異なる点があることは言うまでもない。）

カンナは、グローバル化の現代的く分断＞の一つは、く世代＞によってもたらされているという。「世界的な出来事が、同じ世代でまさしく共通の重要な出来事になったのは、ここ30年に過ぎない。（1991年のソビエト崩壊、2001年のアメリカ同時多発テロ、2008年の金融危機、2020年の新型コロナウイルス感染症の流行。）…ミレニアル世代やZ世代は、とりわけ接続性、移動、持続可能性への権利に関して、世界中の同世代間で価値を共有している。…つまり、世界で起きている分裂はく東対西＞やく北対南＞ではなく、く若者対年長者＞なのだ。」（113-114頁）という。彼らの特徴はどこにあるか？「若者たちの目に映る景色が、私たちのモノとはほぼ全く異なっている。①地政学的競争はく無意味＞、②金融資本主義はく大嫌い＞、③選挙による民主主義はく必須ではない＞、④持ち家はく重荷＞、⑤結婚はくするとしても、まだ先＞、⑥大学教育さえもく費用が高すぎる＞…⑦くどんな技能を習得するにせよ、必ずどこに移住しても発揮できるものにする＞」（114頁）

このような若者たちは、一方で、アメリカ・トルコ・インド・中国などで典型的に見られるくネオ・ナショナリスト＞、すなわち、く愛国心と他者への偏見を結び付けたイデオロギー（89頁）＞を持つ世代でもある。

しかし、その一方で、今日の若者たちは、アメリカに典型的に見られるように、ネオ・ナショナ

リストとは程遠いとカンナは言う。彼らの特色は、以下の4点だという。(91-92頁)

- ① ミレニアル世代: <国民としてのアイデンティティは自分にとって重要だ>は45%で、ベビーブーマー世代(70%)、X世代(60%)と比べ相対的に少ない。
- ② 75%が<アメリカは他国とさほど変わらない>と考えている。
- ③ グローバリストを支持する態度を明確にしている(77%がグローバル化は良い方へ向かう推進力であると考えている)
- ④ 移民よりもポピュリズムに基づく政治の方が、国の安定にとってずっと脅威であることに気付いている

グローバル化が進展する中で、ナショナルな境界を超えた、若い世代の人々は、単に、<世代>の相違としてだけ説明されるだけでなく、また別の文脈でとらえ直すことができるだろう。<文化的オムニボア>は、第二の観点から眺めることができるように思える。それを次節で説明してみよう。

#### 4. グローバル世代: <地球市民>・<世界市民>というライフスタイル

グローバル化の進展する世界において、文化階層を形成するために、特に、若い世代の人々ほどのようなライフスタイルや価値観・道徳観を持つようとしているのかを、素直に考えてみよう。要因として考えられるのは、2つある。一つは、<市民像>であり、もう一つは、<人新世>という全体的要因である。前者については、カンナが、後者については、ハラリが代表的な論者であるが、彼らの考えに沿って考えていってみよう。

カンナによると、そもそも、若い世代(ミレニアル世代やZ世代)の考え方は、その上の世代とは異なるという。「要は、彼らは生きるために働きたいのであって、仕事を生きがいにしたいと思っていない。幸せに暮らして、善い行いをしたいが、でも貧乏は避けたい。…資本と労働の分断が進んでいる今日では、仕事熱心な社員になったからといっても、物質的や精神的に満たされる保証はない」(122頁)し、「給与が支払われるボランティア活動は、絆、人格、仲間意識を築き上げると同時に、目に見える社会的利益をもたらす。」しかしながら、残念ながら、「何にも縛られない資本主義エリートたちと、<地球市民>という言葉が結びつけられたことだ。(例:ダボスマン)だが、<地球市民>を自負している人は、欧米人よりも非欧米人の方がはるかに多い。(ナイジェリア、中国、インド、ケニア、パキスタンなど、BBCグローブスパンの2015年調査)…最も優れた地球市民は、勇ましい努力で行動を起こす」(122-123頁)という。

##### 4-1: 二つのタイプ: <地球市民>と<世界市民>

若い世代は(日本では顕著ではないかもしれないが)、カンナによると、正々堂々とグローバリズムを求めているという。ただし、<地球市民>と<世界市民>と二つのタイプがあるが、この2つの概念は、繋がっているが同じでないようだ。

まず、地球市民というのは、「共通の人間性を抱いていることや、人権や環境といった世界的な問題への関心を抱いていることに関連している。」(120頁)

それに対して、世界市民は、「もっとも単純な意味では、多くの場所に旅したり住んだりしてきた人を指すもの。…進んで根無し草になったということだ。（学生・バックパッカー・企業の重役・起業家といった何らかの国際的な経験を持ち、＜自国への忠誠心を補完する世界的な忠誠心＞という多元的なアイデンティティ意識を身につけた人。）」（125頁）

そして、第一に、地球市民という考え方には、＜コスモポリタニズム＞がその底辺に流れているという。コスモポリタニズムとは、代表的国際政治学者のD.Heldによると、「カント、ペインに代表される、＜倫理的、文化的、さらには政治的コミュニティさえも、単独の国家を超越した席に存在している＞という考え」（124頁）であり、「私たちはいま、故D.ヘルドが＜運命のコミュニティが重なり合っている＞と称した状態の中にいる。ヘルドは、＜人間の普遍的なコミュニティでは、政治的、法的権限を、国家よりも上に移行しなければならない＞と論じていて、さらに＜それを実現できる方法は、下から働きかけることだ＞と指摘している。…＜コスモポリタン民主主義＞を支持したヘルドは、＜民主政治の理想は国境でとどまることなく、国際機関でも追及されるべきものだ＞と訴えた。それによって初めて、＜民主主義をグローバル化すると同時に、グローバル化を民主化できる＞のだと。この主張は、今日でも大勢の＜地球市民＞たちを活気づけている。」（124頁）

ただし、＜地球市民＞だけでなく＜コスモポリタン＞という言葉も否定的な意味で使われてきたという。コスモポリタンの語源となった「（ギリシャの）ディオゲネスは、自身を＜宇宙の市民＞と称したが、彼は金持ちではなく、…物乞いだった。…彼は、古代ギリシャの島々を放浪する中で、＜人のアイデンティティで最も重要なのは、自分が生まれたポリスだけである＞という考え方を否定するようになり、さらに、＜人間が共に暮らすコミュニティには、個人とその身近な家族を超えた、より大きな道徳的責任が存在している＞と論じた。これが＜地球市民＞であることの本質だ」（125頁）という。

そして、「かつての市民権は、政府と社会の間の協定を意味していて、人々は法的、政治的、社会的な権利と引き換えに、勤労、納税、兵役を通じて国家の安寧に貢献してきた」ようだが、それと対照的に、「今日の若者は、義務と権利のバランスを変化させてきている。彼らは、環境持続可能性、デジタルアクセス、ユニバーサル・ヘルスケア（普遍的医療制度）、教育への権利を訴えていて、さらには国際規範も遵守する政府を求めている。…若い世代は、＜保護＞や＜特権＞で民族的アイデンティティや法的義務と関連付けた回答者はおらず、市民権とは個人の権利を確保するものだ」と訴えていて、それを実現するためには戦うことは厭わない」（128頁）人々だという。

カナナは、これらの点を総括して、次の3点にまとめている。

- ① <文明3.0>の段階に入り、「より多くの人々がノマド的な生き方を選び、定住することなく住む場所を次々に変えていくかもしれない。」しかし、「私たちは拡散するが、それでも持続性は維持される。」（193頁）（文明1.0は農業革命、文明2.0は産業革命。）
- ② 地球の運営体制は、＜主権＞から＜管理＞へ、重点が移動する。
- ③ <コスモポリタン功利主義＞や<コスモポリタン現実主義＞が重要視され、「移住は言論の自由や適正手続きと同じぐらい重要な権利であり、…移動は21世紀におけるもっとも重要な人権の一つに数えられるべきなのだ。」（208-209頁）

#### 4-2: グローバル化と価値観・道徳観 (1): ハラリの第一の指摘 (<人間至上主義>)

しかし、世代に着目した要因だけで十分だろうか。さらに、背景的要因として、2つほど指摘しておきたい。

第一に、著名な歴史学者ハラリが指摘するような歴史・宗教・文化が複雑に関係する要因である。彼は、著書「ホモ・デウス」の中で、300年間にわたる<人間至上主義>から、<テクノ宗教>へという要因を指摘し、その中身を、①テクノ人間至上主義、②データ至上主義と考えている。一神教を背景とする、この仮説をそのまま首肯することは難しいが、マクロで長期的な予測としては検討する余地は十分にあるだろう。

ハラリは、まず、人間至上主義については、次のように3つの論点としてまとめられている。

- ① 「人間至上主義は、過去数世紀の間に世界を征服した新しい革命的な教義だ。…人間性を集配し、キリスト教とイスラム教で神が、仏教と道教で自然の摂理がそれぞれ演じた役割を、人間性が果たすものとする。伝統的には、宇宙の構想が人間の人生に意味を与えていたが、人間至上主義は役割を逆転させ、人間の経験が宇宙に意味を与えるのが当然だと考える。…意味のない世界のために意味を産み出せ—これこそ人間至上主義が私たちに与えた最も重要な戒律なのだ。」(34頁)

人間至上主義は、宗教的にはハラリの主張は妥当性があるといえようが、日常的な<意味世界>という点でいえば、人間の情報処理能力が<人工的・情報的世界>を前提あるいは媒介する環境が整いつつあることを意味しているだろう。

- ② 次の論点は、20世紀の自由主義／社会主義という対称軸の意味が大きく変わろうとしているということの指摘である。「人間至上主義が首尾一貫した世界観であるかのように論じてきた。…三つの主要な宗派に分かれた。正統派の人間至上主義では、どの人間も、独自の内なる声と二度と繰り返されることのない一連の経験を持つ唯一無二の個人であるとされる。…個人の自由が大きいほど、世界は美しく、豊かで、有意義になる。…<自由主義的な人間至上主義>あるいは単に<自由主義>として知られている。」(64-65頁)

「19世紀と20世紀には、…二つの全く異なる分派を産み出した。…社会主義的な人間至上主義と進化論的な人間至上主義とともに、人間の経験を自由主義の立場から解釈するのは間違っていると指摘する。」(65頁)

「…社会主義の政治では党が一番よく知っており、社会主義の経済では職種別組合が常に正しい。」(71頁)

- ③ 最後に、進化論的な意味でどのような点が転換されようとしているのかに関する指摘である。「進化論的な人間至上主義者は、…ダーウィンの進化論というゆるぎない基盤に根差しており、…争いは自然選択の原材料で、自然選択が進化を押し進める。」(71頁)

特に、二つの至上主義が進展するプロセスで、新しい文化階層を分析する際に、見逃せないのは、ハラリの<無用物階級>の増大という指摘である。どちらの至上主義からも生み出される新しい階級である。



#### 4-3：グローバル化と価値観・道徳観（2）：ハラリの第二の指摘（テクノ至上主義）

さらに、テクノ至上主義については、次の3点としてまとめられている。

- ① テクノ至上主義がどのように成立してきたかについてである。「テクノ人間至上主義は…はるかに優れた人間モデルであるホモ・デウスを産み出すためにテクノロジーを使うべきだと結論する…最初の認知革命による心の刷新で、ホモ・サピエンスは共同主観的な領域へのアクセスを得て、地球の支配者になった。第二の認知革命では、ホモ・デウスは想像もつかないような新領域へのアクセスを獲得し、銀河系の主になるかもしれない。…この考えは、進化論的な人間至上主義が抱いていた古い夢の、アップデート版の一変種だ。」（190-191頁）
- ② データ至上主義のさらなるトランスフォーメーション（変換）について言及している。「データ至上主義も中立的な科学理論として始まったが、今では正邪を決めると公言する宗教へと変わりつつある。…至高の価値は〈情報の流れ〉で、…人間は〈すべてのモノのインターネット〉を創造するための道具に過ぎない。」（225頁）  
「データ至上主義は、自由主義的でも人間至上主義的でもない。とはいえ、反人間至上主義ではないことは特筆しておくべきだろう。…人間の経験には本質的な価値はないと考えているだけだ。」（234頁）
- ③ 最後に、データ至上主義の今後の見通しと課題についてはである。「データ至上主義の革命には、…おそらく20・30年かかるだろう。…人間中心からデータ中心という世界観の変化は、単なる哲学的な革命ではなく、実際的な革命になるだろう。」（236-237頁）  
「データ至上主義の教義を批判的に考察することは、21世紀最大の科学的課題あるだけでなく、最も火急の政治的・経済的プロジェクトになりそうだ。」（242頁）つまり、〈生命という壮大な視点で見た問題と展開〉（245-246頁）という観点である。

ハラリは、この二つの考えをもとに、科学と情報処理を見据えて、次のような3つの論点としてまとめている。

- ① 科学は一つの包括的な教義に収斂しつつある。それは、生き物はアルゴリズムであり、生命はデータ処理であるという教義だ。
- ② 知能は意識から分離しつつある。
- ③ 意識を持たないものの高度な知能を備えたアルゴリズムが間もなく、私たちが自分自身を知るよりもよく私たちのことを知るようになるかもしれない。

ただし、ハラリの考え方は、一信教の前提に立っているように思われる。したがって、日本社会・文化に当てはめる場合は、さらに、日本の複合的宗教（仏教と神道の混合）や無自覚な無神論的な状況を加味して考える必要があるだろう。

#### 4-4：〈人新世〉という要因への反省

第二に、〈人新世〉という要因がある。これは、様々な科学的成果を総合した判断で、先に述べた二つの〈市民像〉の背後にある、反省的でイノベーティブな要因である。（世界特集1（人新世

とグローバル・コモンズ)、944号、2021年5月号、岩波書店：石井菜穂子、グローバル・コモンズの責任ある管理、72-82頁) 代表的な論者の一人である、石井によると、〈人新世〉を要約すると、以下のような7点があげられるという。

- ① 〈人新世〉という特別な時代、
- ② なぜ我々は人新世に踏み出してしまったのか、
- ③ グローバル・コモンズの責任ある管理、
- ④ 新たなメカニズムの創設、
- ⑤ グローバル・コモンズの責任ある管理の進捗、
- ⑥ 日本の立ち位置、
- ⑦ 今、我々がなすべきこと

ついでにいうと、石井によると、日本については十分な反省と対応ができていないという。「残念ながらその流れ(欧米主導の)にまだ乗り切れていない。なぜネットゼロが必要なのかという科学的な理由付けへの理解が十分でないこと、ネットゼロ宣言への参加が遅れたこと、化石燃料に依存していることやそれを前提とした技術の海外輸出が続いていること、国境を超えて形成されつつあるテーマごとの連携・プラットフォームへの参加が少ないことが要因であろう。…次の二つに取り組みねばならない。第一に、…日本として、セクターごとのシステム転換を視野に入れたパスウェイの設定とそれを実現するための政策パッケージの策定が喫緊の課題である。第二に、途上国を視野に入れた実効ある国際協調体制を日本が主導して確立することが不可欠である。」(81頁)

いづれにしろ、〈人新世〉という新しい段階に突入したとすれば、どの社会や地域にも当てはまることで、グローバルなレベルあるいはスタンダードで、対応していく必要があるということでもあるだろう。

マクロな社会現象から見て、2010年代から、2020年代にかけて、日本においては、客観的な社会的現実である新しい階級状況とは異なり、主観的な面や心理的な面において、別の対照的な〈感情〉や〈気分〉が重要な役割を果たしているように見える。それは、〈生活の満足〉や〈生活の充実〉という側面である。日本人の幸福度や生活満足度は、NHK放送文化研究所や統数研などの国民レベルの世論調査では、継続して高いレベルにはなかった。また、国際比較などから見ると、日本のレベルは常に低いところにとどまっていた。(例：OECDの幸福度調査では、2022年は54位にとどまっている。) それらの中で、2012年のNHK方須文化研究所が行った「NHK中学生・高校生の生活と意識調査2012」において、中高生の9割以上が幸せと感じていることが判明した。ただし、その内容は個人的な狭い領域で感じていて、社会的領域や政治などより広い対象にはあまり関心を示さないものである。彼らは、90%以上は学校が楽しく、親と上手くいっていると答えている。この傾向は、正確にいうと、幸福度というより、生活満足度という形で、継続しているように見える。野村総研が2021年に行った生活者1万人の消費動向に関する調査では、どの年代でも80%前後の高い生活満足度を示している。(野村総研、2022、日本の消費者はどう変わったか：生活者1万人アンケートでわかる最新の消費動向、69頁)そして、関連した成果の充実度については、10代が最も高く3分の2が高い傾向を示し、40代から60代は45%程度に落ちている。

要するに、客観的な社会的位置づけと主観的な満足度の間には明らかに＜分断＞がみられる。ただし、この二つの変数がどのように交わるのかについては明確なデータがないので、はっきりした結論を導き出すことはできない。考えられそうな仮説としては、明らかな階級・階層と主観的評価の間に一種の＜分断＞があると推測する。あるいは、別の推測をするとすると、一方におけるセレブな生活スタイルともう一方におけるローブランド的ではあるが生活の質が保たれている（ユニクロ・生活良品・ニトリ・ダイソー・コンビニ・ファミレスなど）生活スタイルとが、並立している状態にあるという推測である。

興味深いのは、多くの国々とは異なる生活スタイルが、どのような趣味生活や趣味パターンを作っているのかという点であろう。

## 5. DXと文化階層：新しい分析枠組みの可能性

### 5-1：スマートシティとクリエイティブシティ

デジタルトランスフォーメーション（DX）と新しい文化階層をグローバルなレベルで考えるにあたり、それを実装する場所的背景を押さえておく必要があるだろう。それには、二つあって、一つがスマートシティであり、もう一つがクリエイティブシティである。

スマートシティは、新しい社会的集合体であり、歴史は新しいが、多くの国家や都市がその実現を目指して2014年頃から、世界の様々な場所で競争を繰り広げている。また、スマートシティの中身は、本当に多様で、いくつかのタイプに分けることができる。しかしながら、社会的な展開や科学的な進展という観点からみると、最も重要な方向は、将来の宇宙に関する認識や人類の生存をかけた宇宙開発につながるような自律的なスマートシティである。先に述べた、カンナはグローバルな文脈で、次の2つの論点を指摘している。

- ① 「今や遠隔医療から広範囲にわたる監視に至るまでの、あらゆるものを意味するようになった。暮らしのテクノロジー的側面は、魅力と不安が入り混じっている。…若者たちは、人がテクノロジーに使われるのではなく、人の役に立っているところに住みたいと思っている。…スマートシティの1度目の具体化は、企業主導のデジタル化と呼べるものだったが、これからのものは市民の働き掛けによるIOTによって、住民が面倒な思いをせず暮らせる場所になるだろう。」
- ② しかしながら、スマートシティの発展に関して、「…注意しなければならないのは、裕福な国であろうと貧しい国であろうと、スマートシティは＜特権階級が荒れ果てた外界から距離を置くために、新たな都市や地区をつくる＞という、新中世的な階層化を推進するための策になる恐れがある点だ。」（185-187頁）

それから、DXにとって重要なもう一つの場所は、創造都市である。創造都市は、元々はヨーロッパで唱えられ（例えば、イギリスのW.モリスなど）、その後、ユネスコにより、創造都市ネットワークという名称で、2004年からネットワークが築かれるようになってきた。（なお、日本においては、佐々木雅幸大阪市立大学名誉教授等のグループが中心になって展開し、現在、文化庁や多くの行政体がかかわっている創造都市ネットワーク日本（CNNJ）等がある。）なお、ヨーロッパでの展開は、

アメリカにおいてさらに発展をとげる。その際の中心的役割を演じたのは、R.フロリダで、彼は著書「クリエイティブ資本論」(2002)を表し、創造階級とその中核におき、最初はアメリカ国内で説明を始めたが、その後ヨーロッパから世界にかけて説明を広げていった。

現在においては、この創造階級をコアにして、どのようなスマートシティを構築していくのか、そしてその場所において、どのような新しい文化階層が機能するのかというところが重要な焦点になってきている。ただし、情報環境の高度化は、スマートシティにしてもクリエイティブシティにしても、従来の都市像とは異なる、より革新的な未来像を要求しているように見える。例えば、シンガポールのスマートネーション計画などは、文化制度のデジタル化・スマート化を推し進める構想であり、いい悪いや価値判断はあるにせよ、冷静に考えると、一考に値するように思われる。

## 5-2: 情報環境と情報処理経験/レベル

最後に、現在進行しつつあるデジタルトランスフォーメーションと文化階層について考えてみよう。内容は二つあり、最初は、高度化した環境での趣味や嗜好について概略を考え、その後、DXは様々な領域で進行しつつあるが、その中で重要な構成要素である情報環境の高度化について分析を進めてみたい。

情報環境の高度化は、ついに、新しい近代にまで到達したようだ。振り返れば、1970年代後半から1980年代にかけて、ポスト近代論や脱産業社会論等が議論されたが、それらはまださきかけの議論だった。その後、コンピューター技術や情報通信技術が次々に改札され、2020年代に入って、新しい近代を支えるインフラそして人工的環境にまで普及を始めたといつて過言でない。近代の後期がようやくテイクオフしつつあるのではないだろうか。

近代の前期：高度な産業環境が優位する複合的世界

近代の後期：高度な情報環境が優位する複合的世界

そして、人間にとって環境との関わりの違いは、2つの複合的世界のどちらが、そしてどのように優位するのかによって、2つのタイプに分かれる。現代の社会は、この高度な情報環境が優位する複合的世界に突入しつつある。

近代の後期においては、繰り返しになるが、コンピューターによる情報処理と通信（コミュニケーション）技術による情報処理とがインフラとなるような環境である。もちろん、情報環境自体では、さしあたり自律性や独立性は完全にはなっていない。間に、人間が入る。ただし、いずれは、知能の自律化を問題にする必要が出てくるだろう。そこでは、好むと好まざると、近代前期に成立し、自明な前提になっていた価値や規範が問われることになるだろう。その問題への対応としては、既にいくつかの哲学的・倫理的立場が成立しつつある。

近代前期：基本的人権、コンピューターヒューマニズム

近代後期：ポスト基本的人権？、ポストヒューマニズム？、多元的（多極的）ヒューマニズム？

特に、近代後期のポストヒューマニズムやトランスヒューマニズムの問題は、対応不可欠の厄介なものとなるだろう。ハラリの〈人間至上主義〉や〈テクノ至上主義〉やカンナの〈コスモポリタニズム〉の分析、そして、〈人新世〉という新しい地球的条件などは、新しいヒューマニズムに密接にかかわっており、検討されなければならないだろう。

また、情報環境の高度化、特に、AIの普及に伴って、人間が自明にしてきた認識あるいは認知の前提が大きく変わろうとしている。例えば、統計学が前提としていた〈全体〉は、ChatGPTの世界では、前提ではなくなる。例えていうと、「〈全体の相対化〉あるいは〈全体の喪失〉から〈全体の生成〉へ」という大きなトレンド変化といえるのではないだろうか。特に、自然言語処理が高度化されるに至ったChatGPTなどでは、生成と学習による自己組織性の高度化により、今までの〈全体〉の意味が変容しつつある。

なぜ、近代後期の情報環境の高度化が可能になったのかについては、いろいろな要因が考えられるが、その一つに、〈脳の可塑性（Brain Plasticity）〉がある。人間の情報処理の多く、そして中核には脳における情報処理が重要であることは明らかになっている。しかし、その実態は徐々にしか明らかになっていない。大切なポイントは、脳における情報処理が、全て正確に正しい処理をしているとは限らないということが明らかになってきている点、逆にいえば、〈柔軟性〉あるいは〈可塑性〉があることにより、メリットとデメリットが存在するといえよう。例えば、TVやパソコンの画面に映し出される映像は、単に情報にしか過ぎないのに、脳は現実そのものと置き換えて理解することが可能である。あるいは、スマホの映像と音声は、元々は別々の情報であり、単に、両者を同期させているに過ぎないのにもかかわらず、多元的現実を単一の現実と認識することができる。近年の、VRにしてもARにしても、原理的には同様な脳の処理が行われているといえよう。我々の情報処理が行動になればなるほど、世界そのものが情報に置き換わっていきながら、具体的には、デジタルツイン、メタバースなども、新しい情報に基づく世界として、脳が認識するようになってきたのである。

最後に、趣味や嗜好という極めて個人的な行為が、単に、個人レベルにとどまることなく、その外側に関連していること、特に、ブルデューが明らかにしたように、一見自由な行為にみられるが、文化資本や文化階層の文脈でも理解することが重要である。また、単に日本の特色の中で認識するだけでなく、グローバルな状況の中で見ていくことも重要だろう。また、これらの背後には、さらに大きな社会的変動（人々は〈進化〉と呼びたくなるかもしれないが）が進行して、その点を最後に明らかにしようとした。いずれにしろ、時代や状況は〈情報環境の高度化〉や〈複合的な認知形式の変化〉を避けることはできない。前向きに進んでいくしかないだろう。また、本稿では論じられなかったが、〈サイバー〉〈宇宙空間〉等の優れて21世紀的な分野を議論することも決定的に重要であるが、この点は、改めて論じたいと思う。

## 6. 結語：趣味と文化制度めぐるマクロ・長期的課題について

論文を閉じるにあたって、趣味と文化制度の背後にある要因を、グローバルな文脈で、日本が直面しているマクロで長期的な課題として、次の3つにまとめておきたい。そもそも、それぞれの課題の間には、2つの断絶がある。最初と二番目の断絶は、同じ近代社会内のもので、二番目と三番

目との断絶は、極めて大きな断絶であることを最初に言及しておきたい。この大きな断絶を、日本人のあるいは日本社会の文化制度はどのように、生き延びていくのか、あるいは新しい局面を創造できるのか、それこそが本質的な問題だといえるのではないだろうか。

- ① 文化制度のデジタル化は、〈表現の自由〉あるいは〈認識の自由〉をどこまで担保して再構造化できるのかという点に課題がある。日本の場合、元々〈表現の自由〉は、第二次大戦後基本的自由が確保されるようになったが、過度に商業主義的で、将来をしょって立つような大きな幹があるようには見えない。むしろ、伝統的日本文化を見直したり、アニメやゲームなどのソフト文化産業への傾斜が著しいのが現状であろう。また、いわゆる〈趣味活動〉は、現代社会において、文化階層の中核を支えている、例え、商業主義とか〈オタク文化〉とか言われようと、個人のライフスタイルの重要な部分を占め、時として〈生きがい〉を提供していることは確かなことである。その際、①多種類にわたり、②様々な階層に広がり、③職業や政策との境界があいまいになってきていることは指摘しておく必要がある。とはいえ、経済成長や社会の発展が続く限り、今までの路線は可能だろうが、将来における停滞や後退が起きた時に、それでも、少なくとも現状を維持できるのかが問われているし、出来れば、日本のように、キリスト教の伝統を持たない社会では、その中核になるものが、普遍的で輸出可能なものなのかが試されているということをまずは考えて、しかし、いつの時代においても、青年世代が乗り越えていかねばならない課題なのだから。また、日本の階層構造に限定していえば、①大多数の属する文化階層と②〈目立たないようにしている中上層階層〉との相違は、今後も継続していこうだろうが、決して固定的に考えるべきではないことも確かなことのように思われる。
- ② 第1の断絶は、デジタル化に関連している。デジタル化の主要構成要素は、実は、グローバル化への新しい適応政策（いわゆる〈スマートシティ〉などはほんの一例である）だけではなくて、同時に、後期近代社会の転換点であり、断絶を生じさせる変動だと思う。前期近代社会は、第2次産業や大規模生産などの質量・エネルギーインフラの構造的変換点であったのに対して、後期近代社会は、情報処理と通信技術の基本的革新に基づく、情動的インフラの構造的変換点である。それも大規模に本格化しつつあり、AIやIOTの急激な影響（生成型AIはその典型例だろう）はほんの一部の例であり、その背後には、情報処理技術の画期的前進、ロボット技術の前進、IOTによるデータ処理の普及、5G等の通信技術の大幅な改善、等が複合して、〈常時接続社会〉ないし〈セカンドオフラインの社会〉が実現しつつある。それらに対する対応として、〈Industry4.0〉や〈Society5.0〉が計画されてきたが、実際にはその実現は流動的で、計画の最中に新しい次の計画が必要になるというような結末の連続になる可能性が大きいだろう。これが第2のマクロな課題であり、断絶である。そして、この断絶に関連して、趣味文化を分析してみると、従来の伝統的あるいは近代的な趣味活動とは別に、デジタル化に対応した新しい〈趣味活動〉が必要であるし、また、既に展開しつつあるということは言えるだろう。価値判断は別にして、その変化を、社会がどう利用し、育てていくのかが問われている。

- ③ 最後に、先の2つの構造的変換とは、質的に異なる人類のかつ地球の変換点ないし断絶が存在する。20世紀以降科学技術の大幅な進展により、特に、生物化学、地球科学、宇宙科学の発展により、生物進化、地球進化、宇宙進化が次々に明らかになってきている。その際、上記の情報処理技術や過去からの蓄積のある基礎的な物理・化学的な知識は、人間の基礎的認識を大きく変えようとしている。肝心な点は、認識や知識が柔軟で流動的な性格を持っているということである。また、変換の時間的単位が、上記の二つの変換に比べ、はるかに大きくかつ長期に及ぶということである。少なくとも、今までの科学的知識によれば、人類は<人新世>と呼べるような新しい地球物理的な地層あるいは階層が見られるようになり、その結果、地球自体を人類がコントロールする段階に到達したが、地球の環境汚染という地球内の難題を引き起こし、また、その一方で、<宇宙で生き延びる人類>という、こちらも気の遠くなるような難題を抱えていることが認識できるようになった。サイバーや宇宙開発などの新しい領域は、その多くが国家や企業によって、事実上隠されていて、その実態を把握することは難しいが、この難題を解決するためのものであることを、人類は自覚しておく必要がある。社会的集合体（国家・トランスナショナルな集合体・地球社会など）のレベルでこれらの課題を解決しようとすると、ともすると過去数千年前から続く、人類のやり方に左右されることが多い。繰り返しになるが、この大きな断絶は、今までの人類の生き方や認識の経験を、大きく凌駕する性質があり、改めて考え直す必要があるだろう。

いずれにしろ、21世紀の4分の1が終わろうとしている現在、忘れてはならないのは、人間が辿ってきた認識の方法と人工的に作り上げられようとしている情報的環境とは、どこまでいっても、<複合的關係>にあるということだ。人間の側から見るのと、人工の情報環境の方から見ようと、複合的性質を有していることだけは認知しておく必要がある。例えていえば、過去の日本文化が仏教と神道を<神仏習合>として認識したように。新しい地球文化は、コスモポリタニズム、そして、科学的人間認識の複合、によって成り立っているのだから。一神教的認識に基づく、どうしても複合的關係ではなく、一元的認識になりがちであり（一つの極から、もう一つの対照的極へと認識しがちである）、また、無神論的な科学主義からすると、別の意味で、一元的な解釈（ただ事実に基づく法則が存在するだけなのだという解釈）にとどまりがちだと思う。そうではなくて、<複合的な認識>が、少なくとも、それに代わる実態が現れたり、別の認識セットが考え出されたりするまでは、その煩雑な重みに耐えていく必要があるように考える。

最後に、<遊び>や<趣味行動>は、人類にとって、忘れてはならない要因であり、人類の歴史において、個人や集合体の硬直化や紛争を、陰で救ってきた大切な活動であり、どのような環境になっても新しい可能性を、あるいは、生きる方向を示唆してくれるだろう。

付記：本研究はJSPS科研費（課題番号：21H00498）の助成（代表：片岡駒澤大学教授）による研究成果であり、ならびに、駒澤大学GMS学部ラボラトリー（プロジェクト名：社会とメディア研究プロジェクト）の研究成果の一部でもある。なお、本稿は、以下の論文の続編にあたることをお断りしておく。

川崎賢一、[2022]、グローバル化と新しい文化階層、Journal of Global Media Studies, Faculty of

Global Media, Komazawa University, p.p.1-9

文 献

- T.Alizadeh, 2021, *Global Trends of Smart Cities*, Elsevier
- Pierre Bourdieu, [1979], *La Distinction: Critique Sociale du Judgment*:石井洋二郎 (訳)、*ディスタンクシオン：社会的判断力批判* (上下2巻)、藤原書店、1990年
- The Club of Rome, 2022, *Earth For All* : 森・高橋 (訳)、2020、*Earth For All:万人のための地球*、丸善出版
- V.Durrer, T.Miller, D.O' Brien, [2018], *Towards Global Cultural Policy Studies* (in V.Durrer, T.Miller, D.O' Brien (eds.) , *The Handbook of Global Cultural Policy*) , Routledge, 1-16
- R.Florida, [2012], *The Rise of Creative Class (Revised)* :井口典夫 (訳)、*新クリエイティブ資本論：才能が経済と都市の主役となる*、ダイヤモンド社、2014年
- Forbes Japan, 2022、特集：Future of Cities:新スマートシティ宣言、プレジデント社
- T.K.Giap, L.T.Oei,Z.Yanjiang, I.T.Y.En, 2019, *Global Livable and Smart Cities Index*, World Scientific PublishingCo. Pte.Ltd.
- B.Green, 2019, *The Smart Enough City* : 中村・酒井 (訳)、2022、*スマート・イナフ・シティ*、人文書院
- 蜂谷翔音・松本まさ、[2022]、*SO1今こそ学びたい日本のこと：知っているようで知らない日本人の心、食文化、職文化、信仰、地域の魅力など (地球の歩き方)*、株式会社地球の歩き方
- 原田曜平、2020、*Z世代：若者はなぜインスタ・TikTokにはまるのか*、光文社新書
- Y.N.Harari, [2015], *Homo Deus*:柴田裕之 (訳)、*ホモ・デウス：テクノロジーとサビエンスの未来*、河出書房新社、2018年
- 橋本健二、[2021]加速する格差とアンダークラスの危機、*Voice*2021年9月号、156-163
- J.Hawkins, [2021], *A Thousand Brains: A New Theory of Intelligence*:太田直子 (訳)、*脳は世界をどう見ているのか：知能の謎を解く<1000の脳>理論*、早川書房、2022年
- S.Hawking, 2018, *Brief Answers to the Big Questions*:青木薫 (訳)、2019、*ビッグ・クエスチョン：<人類の難問>に答えよう*、NHK出版
- P.Khanna,[2021], *Move:The Forces Uprooting Us*:尼丁千津子 (訳)「、*移動力と接続性：文明3.0の地政学*、原書房、2022年
- 片岡栄美、[2019]、*趣味の社会学：文化・階層・ジェンダー*、青弓社
- 片岡栄美、[2022]、*文化的オムニボアとハビトゥス、文化資本—文化的雑食性は新しい形態の卓越化か—、教育社会学研究第110集*、日本教育社会学会、137-165頁
- 金間大介、2023、*とにかく正解を求める若者たち*、*Voice*2023年3月号、202-209頁
- 金間大介、2022、*先生、どうか皆の前ではめないでください：いい子症候群の若者たち*、東洋経済新報社
- 川崎賢一、2022、*グローバル化と新しい文化階層*、*Journal of Global Media Studies Vol.31*, KomazawaUniversity, p.p.1-9
- Kenichi Kawasaki,[2022], *Contemporary Cultural Policies and Smart Cities: Learning from Global Creative City Singapore*, 24. March 2021,ICCP2021 (国際文化政策学会大会2021)
- 北田暁大・解体研、[2017]、*社会にとって趣味とは何か：文化社会学の方法基準*、河出ブックス
- 国領二郎、[2022]、*サイバー文明論：持ち寄り経済圏のガバナンス*、日本経済新聞出版
- Landry, 2016, *The Digitized City*, COMEDIA
- Luke Martell,[2017], *The Sociology of Globalization (2nd)* , Polity Press
- M. More & N.Vita-More, 2013, *The Transhumanist Reader*, John Wiley & Sons, Inc.
- C.Mellander, R.Florida (eds.) , 2014, *The Creative Class Goes Global*, Routledge
- 持永大、[2022]、*デジタルシルクロード：情報通信の地政学*、日本経済新聞出版
- A.M.Morrison, C.Maxim, [2022], *World Tourism: A Systematic Approach to Urban Tourism*, Routledge



- 中藤玲、[2021]、安いニッポン：＜価格＞が示す停滞、日経プレミアシリーズ  
大空幸星、[2022]絶望した若者たちの救いの言葉＜親ガチャ＞、中央公論2022年3月号、36-43  
P.I.E.Peter Lang, 2016, The Creative City, ENCATC Book Series, Brussels  
J.Rockstrom, M.Kum, 2015, Abundance Within Planetary Boundaries：武内・石井（監修）、2018、小さな地球の  
大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発、丸善出版  
D.E.Rose, 2021, Our Posthuman Past: Transhumanism, Posthumanism and Ethical Futures, Schuwabe Verlag  
E.Rowe, 2023, Brain Plasticity：エリコ・ロウ、2023、ブレイン・プラスティシティー：自ら変える脳の力、  
プレジデント社  
作田啓一、1993、生成の社会学をめざして：価値観と性格、有斐閣  
佐々木雅幸、2012、創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ、岩波書店世界、2023、特集：狂騒の  
ChatGPT、世界No.971、岩波書店  
J.Shaw, 2016, The Memory Illusion：服部由美（訳）、2016、脳はなぜ都合よく記憶するのか：記憶科学が教  
える脳と人間の不思議、講談社  
H. Tomita (ed.) , [2021], The Second Offline: Doubling of Time and Place, Springer  
富田英典、2006、＜複合現実社会＞：Augmented Realityと Social Camouflage、情報通信学会誌Vol.24No.1（財）  
情報通信学会、p.p.1-7  
特集：富裕層のリアル：国内150万世帯、受難の時代、週刊東洋経済2023年6月24日号  
特集：シン富裕層：知られざる億万長者の知恵、週刊ダイヤモンド2023年4月29・5月6日号特集：超階  
級社会：貧困ニッポンの断末魔、週刊ダイヤモンド2023年1月21日号  
特集：狙われる富裕層、週刊東洋経済2022年1月8日号  
特集：新階級社会：上級国民と中流貧民、週刊ダイヤモンド2021年9月11日号  
特集：安すぎ日本：沈む給料、買われる企業、週刊ダイヤモンド2021年8月28日号特集：TOKYO再起動衰  
退か、進化か、日経ビジネス2022.7. 11号、8-31  
特集：世界が称賛する日本の暮らし、News Week日本版、2022. 8.9-16合併号、30-41  
N. Vita-More, 2018, Transhumanism: What is it?, N.Vita-More

#### URL

原田泰、2022、日本の所得格差をめぐる「意外な事実」、国際比較で判明：

<https://diamond.jp/articles/-/297483?page=1>

内閣府調査：

<https://survey.gov-online.go.jp/r03/r03-shakai/2-2.html>

OECD：

<https://www.oecd.org/tokyo/statistics/aboutbli.htm>

<https://elemenist.com/article/2052>